

# 人造人間戦車の機密

——金博士シリーズ・2——

海野十三

# 1

<sup>ま と シャンハイ</sup>  
魔都上海に、夏が来た。

だが、<sup>きんはかせ</sup>金博士は、汗もかかないで、しきりに大きな<sup>ておししき</sup>手押式の<sup>きでんき</sup>起電機を廻している。室内の寒暖計は、今ちょうど十三度を指している。ばかに<sup>すず</sup>涼しい<sup>へや</sup>室である。

それも<sup>どうり</sup>道理、金博士のこの実験室は、上海の地下二百メートルのところにあり、あの小うるさい宇宙線も、完全に<sup>しゃだん</sup>遮断されてあるのであった。

天井裏のブザーが、<sup>きせい</sup>奇声をたてて鳴った。  
「ほい、また来客か。こう邪魔をされては、研究も何も出来やせん」

博士は、例の無精髭<sup>ぶしょうひげ</sup>を、兎<sup>うさぎ</sup>の尻尾<sup>しっぽ</sup>のよう  
うごかして、天井裏<sup>にら</sup>を睨みつけた。

「博士、御来客です。醬買石閣下<sup>しょうかいせきかつか</sup>の密使<sup>みっし</sup>だそ  
うです。はい、只今、X線で、身体をしらべ  
てみましたが、何も兇器<sup>きょうき</sup>は所持して居りませ  
ん。どういたしますか」

姿は見えないが、声だけの秘書が、用事を  
取次いだ。

「何か土産<sup>みやげ</sup>を持っている様子か」

「なんだか、大きな風呂敷包を、背負って  
居ります。どうやら羊か何からしく、X線  
かけると、長い脊髄骨<sup>せきずいこつ</sup>が見えました」

「羊の肉は、あまり感心しないが、糧食難の  
折り柄<sup>おりがら</sup>じゃ、贅沢<sup>ぜいたく</sup>もいえまい」

「では、通しますか」

「とにかく、こっちへ通してよろしい。土産物を見た上で、話を聞くか、<sup>おっぱら</sup>追払うか、どっちかに決めよう」

博士は、<sup>ハンドル</sup>把手から手を放すと、手をあげて、<sup>はげあたま</sup>禿頭をガリガリと<sup>か</sup>搔いた。

醬の密使<sup>ゆうとうてん</sup>油踏天氏が、その部屋に現れたのは、それから五分ばかりたって後のことであつた。

「おう。油踏天か。お前が来るようじゃ、大した土産もないのであろう」

博士は、密使の顔を見て、率直に<sup>らくたん</sup>落胆の色を現した。

「いや、博士。本日は、わが醬主席の密命を帯びてまいりましたもので、きっと博士のお<sup>ちんみ</sup>気に入る珍味をもってまいりました」

「羊の肉は、くさくて、嫌いじゃ。

第一、羊の肉が、珍味といえるか」

「羊の肉ではございません。なら、用談より先に、これをごらんに入れましょう」

密使は、背中に負っていた大きな包を、  
機械台のうえに<sup>おろ</sup>下した。博士は、鼻をくんく  
んいわせながら、<sup>そば</sup>傍へよってきた。

<sup>くんせい</sup>「燻製じゃな。いくら燻製にしても、羊特有の、あの動物園みたいな悪臭は消えるものか」

「まあ、黙って、これをごらん下さい」

密使油が、包を派手にひろげると、中から  
<sup>ねずみいろ</sup>鼠色の大きな動物が現れた。顔を見ると、やはり鼠に似ていた。

「ほう、これは大きな鼠じゃな」

「金博士。鼠ではございません。これはカンガルーの燻製でございます」

「カンガルーの燻製？」

博士は、目を丸くして、両手を意味なく、ぱしんぱしんと叩いた。

「さようです。カンガルーです。これは只今醬主席の隠れ……あ、むにやむにや、ソノ、特別特製でございます」

「特製はわかったが、むにやむにやというところがよく聞えなかったし、一体これは、どこの産じゃ」

「はあ、それは御想像に<sup>まか</sup>委せるといたしまして、とにかく醬主席は、かような珍味を博士に伝達して、その代り、博士におねだりをして来いということでありました」

「なんじゃ、わしにねだるといって、また新発明の兵器を譲れというのじゃろう。

昔の<sup>いんねん</sup>因縁を考えると、わしとて、譲らんでもないが、しかしあのように敗けてばかりいる

のでは<sup>はりあ</sup>張合いがない。

——で、<sup>とうじ</sup>当時、<sup>じゅうけい</sup>醬の奴は、どこにいるのか。

<sup>じゅうけい</sup>重慶か、<sup>せいと</sup>成都か、それとも<sup>こんめい</sup>昆明か」

博士の質問は、密使油にとって、<sup>はなは</sup>甚だ痛かった。当時、<sup>きか</sup>醬主席およびその麾下百万余名は、その重慶にも成都にも、はたまた昆明にも居なかったのである。

「は、それはわが政権の機密に属する<sup>じこう</sup>事項でございませうから、私から申上げかねます。しかし、主席はぜひ博士の御好意によって、最近御発明になったあの……」

といいながら、密使は一応四方八方へ気を配った上で、

「……あのう、それ、<sup>じんぞうにんげんせんしゃ</sup>人造人間戦車の設計図をお譲り願ってこいと申されました。どうぞ、<sup>ゆず</sup>ぜひに……」

「あれッ。ちょっと待て。わしが極秘にしている人造人間戦車の発明を、どうして、どこで知ったか」

「それはもう、<sup>じごくみみ</sup>地獄耳でございます。それを下されば、このカンガルーの燻製を置いてまいります。下さらなければ、<sup>せっかく</sup>折角ですが、カンガルーの燻製は、再び私が背負いまして……」

「わかったよ、もうわかった。あの醬め、わしが、珍味に目がないことを知っていて、大きなものをせびりよる。よろしい。では、その設計図をやろう。これが、そうだ。組立のときには、わしに知らせれば、行って指導してやってもいい。しかしそのときは、うんと<sup>だいしょうぶつ</sup>代償物を用意して置けよ」

そういって、金博士は、大きな青写真にとった設計図を、<sup>お</sup>惜し<sup>げ</sup>気もなく密使に渡してし



まったのであった。